

◆雪虫が今年も来た 「木村 弘文」

12月の初めの頃、庭に出たら、ふわりふわりと何かが浮遊しているのが目に留まった。よく見ると雪虫ではないか。ああ、今年も来てくれたかとうれしくなり、つい、ひょいと手で捕まえてしまった。たちまち、雪虫は手の中で息絶えた。私が、命を奪ったのだ。雪虫って、冷たい空気の中でしか生きられないのかも…と思った。この小さな生き物がなぜかとても哀れに思われ、せっかく季節を告げに来てくれたのに、申し訳ないことをしたと胸が痛んだ。雪虫は冬の使者とも言われ、現れると間もなく本格的な寒気がやって来る。しっかり備えなさいよと教えてくれた小さな命のいじらしさ。毎年、この出会いを楽しみにしている。今年は人騒がせだったクマたちも冬眠に入るだろう。いろいろあった一年だが、心身に大過なく過ごせたことで良しとしよう

雪虫よ、来年もまた会いましょう。



◆オールドメディア 「千葉 一成」

新聞、テレビ、ラジオといった情報伝達手段は、インターネットやSNSの台頭によって「古い」と見なされがちだが、その役割は社会において依然として重要である。最大の特徴は、編集者や記者による情報の選別と検証を経て発信される点であり、信頼性や公共性を担保する仕組みを持つ。これは真偽不明の情報が瞬時に拡散する現代において、逆に価値を増していると思う。課題も多い。速報性や双方向性に欠けるため、若年層の関心はネットメディアに移行。それでも、調査報道や地域密着型の取材に強みを持ち、公共性の高いテーマを体系的に扱う力は健在だ。

オールドメディアは「遅さ」や「重さ」を武器にできる。情報環境が混乱する現代において、正確性と公共性を守る姿勢こそが、社会にとって価値を持ち続けることだろうと思う。

オールドメディアのメリット

- ①認知獲得が可能
社会全体に広く浸透させられるスケール感は、やはり他のチャネルでは代替できない強み
- ②信頼構築が可能
発信される情報は徹底した「裏取り」や「取材」に基づいているため、企業や団体のブランド価値を高める効果がある
- ③権威性が高い
企業の経営層や官公庁の幹部などにアプローチする際には、オールドメディアへの露出が効果的



◆自然災害の脅威 「佐久間 隆」

2025年を振り返れば、大雪や台風、大雨や地震に猛暑、林野火災、クマによる被害もあり、つくづく自然の脅威を実感した年になりました。

災害はもう何も起こらなければ良いなと思っていたのに、年末に大分県佐賀関で大規模な火災が発生し、多くの建物が焼失してしまいました。被災者を思うと言葉もありません。この火災ではお年寄りや、足の不自由な人を近所の人が車に乗せて避難所に連れてくるなど、住民の助け合いが多くの命を救ったことも報道されました。東日本大震災の時、おにぎりや使いきりカイロをもらったご近所同士の助け合いを思い出しました。

2026年は日頃から防災を心がけ、人との絆を大切に、災害のない希望の満ち溢れる年になるようにと、祈らずにはられません。



◆ステルス値上げ 「佐々木 栄尚」

次々と商品、利用料の値上げが国民生活にダメージを与え続けている。我が家でも、エンゲル係数が右肩上がりで行進している。行く末が心配である。

商品値上げもさることながら、腹立たしいのは「ステルス値上げ」である。価格は上げていないが、商品のサイズが小さくなっていることに最初は驚いた。薬、入れ歯洗浄剤、歯磨きなどの成分の減少。ラップの薄さなどなど、ここまでやるか。ステルス値上げは、各社の商品の原材料、人件費、輸送費などの上昇に伴うやむを得ない対策かもしれない。だが多くの消費者は、他社の商品に切り替えたり、購入頻度を少なくしたり企業の信頼度も下げているのではないかな。ステルス値上げは、世界的な経済問題となっているようだ。

不透明な時代だからこそ、消費者との信頼を高め、企業価値アップを図るべきだろう。



◆もうけ話は無し 「後藤 幸一」

世の中「もうけ話」はあり得ない話です。退職金などのまとまったお金を元手に、株式投資で失敗した人の記事が新聞に紹介されていました。国が積極的に勧める「貯蓄から投資」への流れでもあり、投資は昔に比べて私たち庶民にも大変身近な存在になりました。

「〇年で〇億円ためた」などの夢のような話を聞けば、誰しも興味を持つのも無理はないでしょう。その気になる人が多くいるのも事実です。実際私も過去に、雑誌で「おいしい情報」に踊らされかけました。しかし、冷静に考えれば、素人が手を出して簡単に利益が得られるほど投資は甘い世界ではないでしょう。

今年は午年だけに「うまい話(もうけ話)」がわが家に転がってこないように



●部活動の”OB会”は誰がために ●「OB親睦会」とは？

※1年に1度、同じ部活動に所属していたOB、OGが集う会のこと。

※かつて自らが学生だった時代を懐かしんだり、現役世代（学部生）と交流する場所になっている。

